

三等賞

先の帝の實録を拜し參らせて

中澤伸弘

かしくも昭和のおほみかどの天隠れたまひしよりみそとせにもなりなむとするに、このみかどのひと代を記しまつるみふみの、宮内のつかさびとらがまとめ參らせ、この春には櫻木にゑりてふたまきのふみまきとして世に廣くあまねくわかちけり。いぬる年の秋にはこのみふみいできて、すめらみことの御前に奉られ、またおほみこころにやよりけむ、み濠のうちの宮内の圖書のつかさにて、くにたみの讀むをゆるしたまひけり。われはもや、とくまうでは、ここかしこ、あの日この時と書き寫しに寫し、そのたびごとに八十七年にわたらせたまひし、先のみかどのおほん一代を拜しまゐらせ、ひじりのおほみわざに身のをのき、あるはかしこきおほみこころに熱き涙の頬をも傳ひ、あめつちの榮ゆる御代に生まれあへる喜びをひとかみしめては桔梗のはねばしよりまかりいではべることいく日か重なりぬ。

このみふみよ、はやう世に出でなむ。身近になりて日なが讀まん。そはいつしかと、われなも心もとながりて待ちに待ちはべりしを、出でたると聞きてはしるはする文屋よりとくあがなむとめ、みゆかり深き卯月のふたまり九日の、春の若葉の照る一日を窗べの光あまねきところを獨りしめて、こころ靜かに一の巻のあれましし日のことどもよりひとひらひとひら繰りては讀み、讀みては繰りなどして、幼くおはしましし明治の大御代にかしくおはしましし昔語りをも知り、橘の花の薫る夕べ、梅雨の長雨の

折々にうむこともなく讀みつづけまぬらしつ。またふた巻きに移りては、日嗣のみことならせたまひし大正のはじめ、おぎろなくおはしましし十臺の若きお姿を蟬の鳴く夏のさなかのころほひに、暑さをもころにかけて讀みふけりては、その時のみころをばただに思ひまぬらせたり。こはいともありがたきみふみならんやは。さてふた巻を讀みはてぬれば時はや長月にうつるひぬ。をりしもまたふた巻きの世に出でて、こをもまた文屋の届け來たるを、はや讀ままくほりすも、世のたつきのいそがはしくあればとく讀みいづるもままならぬままに、恐れおほくもふづくゑのすみに積み上げてありしを、秋もふかまりゆく日にややと覺え時をえて、木犀の香の漂ひくるつぼねの内に座して、氣のつけばはや秋の日は落ち、さてはとともし火近くに親しみつつ夜のふけるをもかまひなく、かの西の國へのいでましをば記しまぬらせし文らを時のわするがに讀み繼ぎ、またの日の秋風のそよと吹ききて仕事のつかれを癒す夕べには、帝をたすけ奉らせたまふ攝のおほん身に就かせたまひしのちのことども、わきてはかの關東のおほなぬにみころくだきましし日、きさいの宮のうちへ嫁ぎましし時のことどもをばかしこくありがたく拜しまつりぬ。

この語りごとはこをば。ひたぶるにこのみふみを日ごと押し頂きて讀みまぬらすに、はやう二十歳すぎにおはしまししより、父の帝のおほん病ひにかはりて天のしたしろしめしたまひ、上は神を祀りたまふてぶりもかたじけなく、下はおほみたからにめぐみの露をかけたまひしおほみわざかしこく、まのあたりを拜しまつるがごとくにて目頭にあつく涙落つるがこちするほどにてありけらし。

昭和の御代に生まれしわれどちの、さきのみかどを偲びまつるころは、月日とともに變はることなく、

いよよますます高くなりゆくものぞかし。このみふみこそわがくにたみの廣く讀まではあらぬべき文こそあなれ。かくも若くましまししより聖のきみのおほんうつはにて世をたもたせたまひしおほんあとを偲びしのびに思ひまぬらすものにぞある。こは御代御代のすめらみことの民の幸を祈りたまふおほみころの重ねに重ねきたるわがすめらぎのおほみころによるものとはいへどもなほこのみかどのみころうちのことにあめれ。

この續きの卷は來む春に三つ、昭和の十四年までのもののできなむとぞ。かの戦ひの激しくなりゆくまにま、おほみころを惱まし給ひしおほんいたつきを拜すべうはややつづきの讀ままほしく思へば、櫻の花の咲くころの今ゆころまちにまたるるにこそ。